原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第二百二十五号

原告団レポート

遺族――平川厚子さん

下請けで下って八カ月目に爆発

病癒え、再び公判へ

たび重なる不幸を乗り越えて

下楠田渡瀬

「パトカーに追われた乗用車と居眠り運転の車とが二回飛び込んできましてね。地震みたいに家が揺れ、とび起きます。玄関はメチャメチャです」

対話中も、間断なく車が通り、ダンプが地響きをたてていく。そのたびに家が震える。

平川厚子さん(昭和十年十二月二十六日生まれ)の住居である三池郡高田町下楠田渡瀬千四百六十七番地は、国道二〇八号線沿いにある。

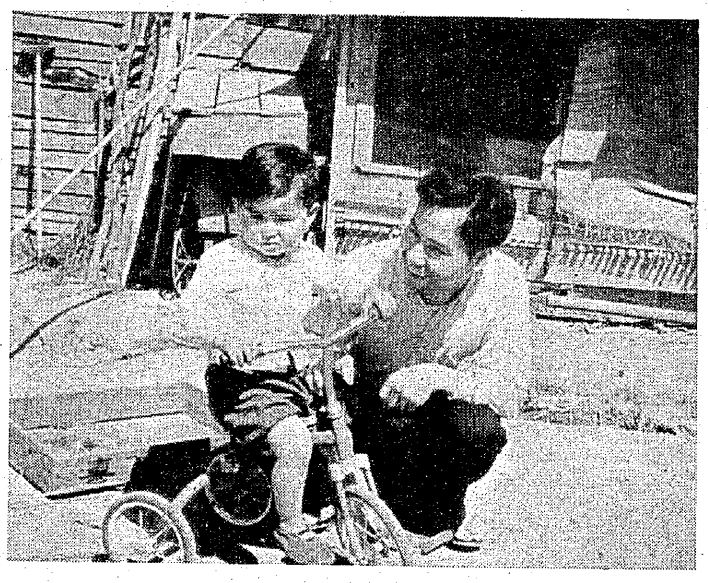
西鉄渡瀬駅を降り、北へ国道沿いに約二百メートル歩く。車社会になる昔からある町並みは、寺や神社、土蔵作りの家が並び、初夏の若葉がひるがえり、麦秋の田園が広がるのどかな地帯だ。

「私は大牟田市本町六丁目で生まれました。白金町の西鉄バス営業所や拘置所の辺りは、昔公園でして、子供の頃はよく遊んだものです」

「ここへ来ましたのは小学校五年生の時でした」

伯母の宮本友吉、チトセ夫妻に子供がなく養女となった。宮本夫妻は昭和の初期、当地で菓子、果物の商店を開いている。

「頑固でしたが元気のいい父でしてね。渡瀬の祇園さんでは、毎年太鼓をたたいていました」



昭和35年ごろの末彦さんと高志くん。

炭鉱八カ月

「結婚は昭和三十二年四月二十八日でした」

ご主人の平川末彦さん(昭和七年十二月十八日生まれ)は、当時大牟田市横須にある三井電気化学工業で働いていた。

「主人と一緒に働いていた人がこの近所におられまして紹介されたのです」

平川さんの実家は荒尾市下井手古庄原にあり、そのすぐ傍に家を借り、電化まで自転車で勤めに出ていた。

翌年の昭和三十三年十月二十九日、長男の高志さんが生まれた。

三池闘争後の昭和三十六年九月二十八日、次男の勝美さんが生まれた。

「大変な子煩悩でして、二歳になったばかりの勝美を前に、高志を後に乗せて、自転車であちこち行ってました」

末彦さんは電化で作業中に親指を骨折し、勤めをやめた。知り合いの人の紹介で、三井建設の坑外で最初は仕事していたのだが、坑内に移った。三新建設の一員として三川鉱に入ったのは、昭和三十八年三月一日だった。

「最初は三交代で棹取り(運搬)の仕事をしていると言っていましたが、爆発前に常一番にかわり機械の仕事をしていたようです」

末彦さんは休まずに出勤した。

「坑内はたいへん暑い所だと言ってました。腰まで泥水につかり仕事をしてきた時などは、特に疲れがひどかったようです」

昭和三十五年の三池闘争後、会社は新労、職員組合の全面的な協力のもとで、つぎつぎに合理化を強行してきた。その合理化の一つとして、下請、組夫労働者の導入があった。

低賃金で、組織を持たない組夫労働者を使用することによって、合理化のテンポをスムーズに進めることができるからである。

昭和37年夏、夫婦で

本社体育館

「あの日、私は風邪をひいてて気分が悪く休んでいました。稲刈りも少し残っていましたので、休んでほしかったのですが」

厚子さんにとって思い出したくない記憶だった。

「主人は男四人、女四人兄姉の一番下なのです。兄の隆雄さんも三川鉱に勤めていましたので、連絡には友達の方が来られたのです」

会社からは何の連絡もなかった。

テレビ報道で知った親戚の人たちが駈けつけてきたが、社宅と違い、しかとした情報を知ることができなかった。

「夜半、うつらうつらしている耳元に主人の帰って来た下駄の音を聞いたのです。ほかの人たちは聞かなかったそうですが、私には主人の生きて帰りたいという必死の思いが、下駄の音で伝わってきたのだと思います」

十一月十日、夜の明けるのを待って厚子さんは近所の人と自転車で三川鉱へ行った。三井建設の事務所に行ったら、三新建設の事務所を教えてくれた。事務所は天領病院の傍の山下町にあった。室内には数人の男たちがいた。

「平川末彦さんとは午前中まで一緒に仕事をしていました。私が健康診断を受けていなかったので、昼から昇坑して助かったのですが」

絶望が色濃くなった。天領病院へ行った。トラックに積まれた遺体が、病棟の隅に止まり六、七体在の時に、稲刈りが終わったあと渡瀬で一緒に暮らすことになっていたこともあった。

「おじいちゃんが父親がわりで育ちました。戦争末期、物価統制で店ができなくなったので、三川鉱に下がって働いていたことがあったそうですが、体格もよく、病気知らずでした」

その友吉さんが仕入れにでかけを降ろす。掲示にマジックで書かれた氏名を読む。見つけることができなかった。自転車で体育館に行く。

大きな会社の体育館に棺がずらりと並べられ、線香の煙が目をさすほど中にこもっていた。辺りをはばからぬ泣き声と人の出入りでごったがえす中で、末彦さんをさがした。

「すでに棺に納められていました。昇坑途中にCOにやられたのだと思います」

火葬は熊本市まで行かねばならなかった。夜、出発した。

「下請だったからでしょうか。最後から二番目でしたので、帰ってきたのは朝でした。あんなに遅くなるとは思っていませんでしたので、おしめが足りなくなって、父が朝早く火葬場周辺の薬局に紙のオムツを買いに走ったのを、よく憶えています」

現在の平川厚子さん

父母の力で

末彦さんの三十五日が過ぎると五歳と二歳の子供を連れて、渡瀬の実家へ来た。末彦さんがまだ健在の時に、稲刈りが終わったあと渡瀬で一緒に暮らすことになっていたこともあった。

「おじいちゃんが父親がわりで育ちました。戦争末期、物価統制で店ができなくなったので、三川鉱に下がって働いていたことがあったそうですが、体格もよく、病気知らずでした」

その友吉さんが仕入れにでかけを降ろす。掲示にマジックで書かれた氏名を読む。見つけることができなかった。自転車で体育館に行く。

大きな会社の体育館に棺がずらりと並べられ、線香の煙が目をさすほど中にこもっていた。辺りをはばからぬ泣き声と人の出入りでごったがえす中で、末彦さんをさがした。

「すでに棺に納められていました。昇坑途中にCOにやられたのだと思います」

火葬は熊本市まで行かねばならなかった。夜、出発した。

「下請だったからでしょうか。最後から二番目でしたので、帰ってきたのは朝でした。あんなに遅くなるとは思っていませんでしたので、おしめが足りなくなって、父が朝早く火葬場周辺の薬局に紙のオムツを買いに走ったのを、よく憶えています」

子らは育つ

「十一月九日」

三川校五年二組　平川高志

おとうさんが　死んだ日。

三川鉱がばく発した日。

もう　七年になる。

笹林公園で、

いれいさいがあった。

おかあさんが行った。

こめぬか油の代表者

イタイイタイ病の代表者

ガス中毒　CO患者

みんなが

じぶんのくるしみを

なみだをながしながら

話したそうだ。

じっと見ている

写真のおとうさん。

弟はそのおとうさんしかしらない。

しんせきの

おじさんやおばさんが

おまいりにきた。

せんこうのけむりが

むらさき色にながれる。

小さな声で

「おとうさん」と

呼んでみた。

のどに大きなかたまりが

ぐうっとあがってきた。

この詩は柳川市、山門郡、三池郡内の全小学校の生徒から応募して作られる『からたち詩集』(毎年一回発行)の佳作の部に収録されている。

弟の勝美くんも腕をふるう。福岡県小学校児童画作展の版画の部で特選となる。小学校三年生の時で、久留米文化センターでの表彰式には厚子さんとともに出席した。

高志さんは三池工業高校電気科を卒業し就職、勝美さんも大牟田商業高校を卒業し、コンピューターの学校へ進んだ。

病も癒えて

昭和五十五年、おじいちゃんは いつものように自転車で仕入れにでかけた。しばらくして、おじいちゃんが交通事故にあったという知らせがきた。引き逃げだったが、すぐにわかった。近くの山林を宅地造成しているダンプカーだった。

たび重なる不幸、そして商売のことを考え働いているうちに病に倒れ、入院しなければならなくなった。店も閉じた。東京に就職していた高志さんが心配して帰ってきて、大牟田市内に就職した。

「おじいちゃんの死は子供たちにとってもショックだったのです。旅行が好きで新幹線に乗ってあちこち歩きたいと言ってましたから、子供たちもその夢を実現させたいと心の中で思っていたのでしょう。引き逃げした車を絶対に許すことはできなかったのです」

兄弟が力を合わせて頑張った。

厚子さんの病気も快復に向かった。

「息子がですね、黙って参加して、みんなばびっくりさせんねと言うものですから」

三月二十三日、福岡地裁へのゆるい坂を久しぶりに歩いた。十一・九公判が午後一時に開かれるからだった。傍聴に集まる同じ原告団と会えるのも楽しみだった。

開廷前の廊下は原告団、組合員、主婦会員でいっぱいだった。あいさつを交わす原告団の仲間たちは、病の癒えたことを心から喜んでくれた。

公判は、荒木証人に対する主尋問と会社からの反対尋問だった。

厚子さんにとって、夫の生命を奪い、義兄である平川隆雄さんをCO中毒患者にした大災害の原因と責任を追及するたたかいに、ふたたび参加できた喜びで胸がいっぱいとなった。

「なにもできないのですが、これからも皆さんと一緒に子供たちとともに頑張っていきます」

言葉少なに決意を語る厚子さんには、幾多の苦労を乗り越えてきた確信があった。

※　※